㈢河畔の分教場から大沢川原校舎へ

授業開始　さて、大沢川原の女子師範学校附属小学校の校舎一部借用の件は県参事会の承認を得たものの、種々の事情で附属小学校の移転がおくれていた。そこで取りあえず盛岡尋常高等小学校分校教室（現杜陵小）の一時借入れを市に請願し、二十三日付で向こう十日間の貸付をうけることになった。ともかく借家ながらも授業開始にこぎつけたわけである。四月二十四日、岩中は中津河畔の一角でうぶ声をあげた。

開校時の教師陣は次のとおりであった。

修身　校長　文学士　鈴木　卓苗
国漢地歴教諭（教務主任）　鈴木勝二郎
英語教諭　文学士　太田　定康
体操武術教諭心得兼書記　島軒十次郎
数学講師嘱託　理学士　太田　達人
音楽教諭　新藤　武

鈴木校長は帝大学生監、高知高等学校長事務取扱、栃木女子師範学校長の経歴であった。鈴木教頭は一関高等女学校長、県立図書館長。太田講師は樺太中学校長もやった教育界の大先輩であり、文豪夏目漱石の友人であった。太田教諭は三月東大を卒業したばかりの新進、島軒教諭心得は戸山学校で秩父宮・閑院宮両殿下の師範を奉仕した経歴の持主であった。

鈴木卓苗校長　学校開設で最も苦心したのは校長の人選であったという。校風の基礎をすえる初代校長は、大人物でなければならなかった。候補に上げられたのは鈴木卓苗である。鈴木は人格者であり、学識経験ともに卓越した天性の教育者であった。

鈴木は当時栃木女子師範学校長奉職中で令名が高く、仙台の女子専門学校長に迎えようとの動きも起っていた。この鈴木に、まず鏡保之助が書面を送った。ついで関壮二が訪ね、富田小一郎が訪ねた。学友柴内魁三からも書面がいった。いずれも郷党子弟の教養のために来任してほしいとの勧誘である。

鈴木は私学経営を辞退しようといったんは考えたが、日ごろ、窮屈な機械的教育にあきたらずにいたところから、私学であればいっそう人性に順応して個性伸張の自由な教育を施すこともできるだろうと、その就任を決意した。

四月十七日、鈴木は宇都宮からまっすぐに盛岡入りし、三田邸に義正翁を訪ねた。その時、義正翁の「県下教育の為に一異彩を点ぜんとするの素志あり」の言葉に感銘を受けた。新聞記者から就任の感想を求められて、次のように答えている。

「私立の学校は自分流儀の教育、自分の考えを以て教育することができる。公立の学校であると他の同僚学校との間に遠慮があったり、当局のご方針等を顧慮する結果なかなか教育者の思うように行かぬが、私立ではそれを超越してやれる。又私は此処の富田先生等の経営している岩手育英会の第一回の貸費生として非常に恩恵を受けた。いつか当地に対して報恩をしたいと思っていた処その好機会を与えられたので幾分でも郷土にご奉公いたしたい。現在まで奉職していた土地も名残り惜しくは思うが、かかる機会はまたあるものでもなく且つ全部任せて下さるというので決心して参ったのである。」

鈴木校長は、前任校の退官事務がおくれていたが、六月八日依願免官の辞令に接し、即日本校校長に就任した。家族と共に盛岡入りしたのは六月十六日。翌十七日就任式を行い、改めて校風の基礎について訓示した。

（就任挨拶抜萃）

「私は本校に於て学園主義の教育を施そうと思っているが、しからば学園主義とは何ぞや。従来教師はただ学科の注入に忙しく、試験という一定の尺度を以て生徒の知識を試験し、その標準に合わぬ時は落第をさせ孜々としてこの基準に合致させることをつとむるのである。こういう方針は生徒の個性を無視し、その活動気分を抑制すること甚だしいものである。それで私は諸子を植物の幼芽と看做し、職員は園丁として之に臨み、害虫を駆除し肥料を施しその天分の発達を企画しているものである。諸子はこの学校の意図に信頼し最善の努力を致されたい。殊に諸子は第一回生として自ら校風の樹立に当るものなれば一層責任の重大なることを感得しなければならない。」

大沢川原校舎へ　中津河畔での仮住まいは一カ月余り続き、五月二十七日に大沢川原校舎（現岩手女子高）へ移転した。やはり借家には違いなかったが、汽車から降りて宿屋に落着いた感じだ

ったと当時の生徒は書いている。移転前は、授業もなかなか時間割どおりに進まなかったらしい。生徒の間に「また漢文」という言葉がはやったが、これは、ある科目の授業が職員の手不足のためほかの科目に切替えられる場合、たいてい漢文の時間になったので、「また漢文、また漢文」というようになったものであった。しかし、移転後は、このようなこともなくなった。

大沢川原校舎に移って少したったころ、帽章が制定されている。生徒だった松田巌雄は、そのときの喜びを、こう表現している。

「本校の帽章が出来上ってきたのは同年の七月頃だったろうか、それまでは帽章の無い帽子、又は何処かの中学校の帽章等をつけて歩いたりした。未だ帽章が出来てこない頃、先生方を困らしたのは『帽章は何時出来るんですか？』という問いだった。殊に教頭先生の顔を見るときつとそう言った。太陽の熱に毎日浴している吾々は太陽熱の有難味を平気に思っているように、立派な帽章を入学当時からつけている人々には、未だ帽章が出来ていなくて、毎日先生へお願いしたりする心はわからない事だろう。

それが或る日の事、なんでも甲乙合併授業を乙組の教室で受けて居った時だった。一人の丁稚らしき人が玄関から入って何か私達に見せびらかして職員室に入った。丁度よく教室のドアが開かれて居ったのだから之を見た私達は、帽章だということはすぐ合点が行った。けれど何分授業中であるので誰も行く事が出来ず我慢して時の過ぐるのを待ったのである。そしてその休み時間にその帽章並びにボタンが渡されたのだった。初めて見た帽章は何んだか思ったより良いという人もあり悪いという人もあったが兎に角今見る様な帽章に定まったのであった。

帽章をつけてからの悲喜劇と言えば悲喜劇だが、よく商業の生徒と間違われたのだった。勿論未だ広く一般が本校の存在を知らなかったからそんな事も生じたのであったろう。自分も一度商業学校の生徒と間違われたのは停車場前であった。その内に今の校旗が寄贈になり斯くしてその基礎は一歩一歩固って来たのである。」

（「石桜」二十六号）

〈卓苗校長日記より〉その一

開校時から校長室で時を刻んだ時計

ロイド・ファースト

〈本校の迎えた最初の外人教師である。大正十五年九月に着任して、翌年七月に辞任した。在任期間が短かいためか、古い「石桜」にもその名が見あたらない。卓苗校長の日記に、一度だけその名が出ている。〉

昭和二年四月十八日　晴　霜きびし

ダンデライオン――「タンポポ」

あまりに似つかはざる花の名にて、フアウスト君に話すと、字書を調べてみて仏語の「獅子の歯」の意より出でし語なりといふ、うべなるべし。

新渡戸稲造

昭和二年十月五日　曇　晴

朝礼　新渡戸先生の講話に因みて（種々）

講　話

午後一時より二時まで

「創設校としての特色を樹立せよ」

有益なるお話なり。

授　業

午前中にて打切る。

揮　毫

「憂国」の二字を先生に依頼す。

兎狩りと創立記念日

昭和三年二月十日　晴　兎狩好日和

雪中行軍（八時大日社前集合）

妙泉寺裏山方面兎狩

兎　五　頭
山鳥一羽　を獲物とす。

一同大によろこび帰る。

正午下山す。

昭和三年二月十一日　晴天　好日和

紀元節（九時―十時）

本校創立記念式（十時―十二時）

記念式後

生徒一同祝賀会

（兎汁にて午食）

職員は宿直室にて午食

（自分岩手川三升を呈す）